

モノ語り

【シリーズ82】

このシリーズは、風土が生んで、歴史が育てた博多のかたち・地域の誇りを紹介するものです。物言わぬモノたちの声を聞いてください。



たけうちきみお 1954年生まれ。国内の調律師養成機関で学び調律師に。88~90年に渡米し米国人調律師の下でスタインウェイピアノの調律について学ぶ。90年代後半にはドイツでスタインウェイの技術研修を受ける。本ピアノの音色のデジタル保存や活用にも関心を寄せる。

トグランドピアノ モデルC。スタインウェイピアノには米国の工場で製造されたものと、ドイツの工場で製造されたものがあるが、このピアノはドイツ製。かつて福岡市中央区天神にあったジャズクラブ・ブルーノートフクオカで数々の演奏家に愛された。

同ジャズクラブは1990年にオープン。本場米国スタイルの生演奏が楽しめる店で、国内外のトップアーティストが出演、音楽ファンに親しまれた。当時を知る人によると、ピアノは会場用に国内で購入され、出演するアーティストの勧めもあり調律師になった武内さんが、米国やドイツでスタインウェイピアノの調律技術を学んだ経験が生かされた。

スタイルピアノ用のチューニングハンマー



福博の音楽シーン彩った

「スタインウェイのピアノ」

数々の名演奏を支えたピアノ



1990年代から2000年代にかけて、福博の音楽シーンに鮮烈な印象を与えた米国発のジャズクラブが福岡市にあった。惜しまれつつ閉店したが、会場で愛されたピアノが今も福岡県内で美しい音色を響かせ続けている。ピアノをめぐる「モノ語り」とは――。

1990年にオープン 音楽ファンに親しまれ

福岡県久留米市善導寺町。筑後川に近いこの地区に、概観も愛らしいミュージックサロン「クラヴィアート音楽館」がある。ピアノ調律師、武内喜美郎さん(65)が経営。平屋建て、面積約50平方メートル。室内に入ると、美しいグランドピアノが目に飛び込んできた。

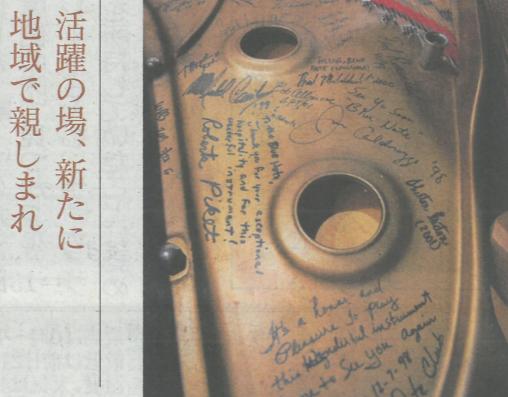
世界的なピアノメーカー、スタインウェイ&サンズ社が製造した「コンサート」が目撃された。

アーティストの 音づくり支える 調律、メンテナンス

調律はどのように行われていたのだろう。

基本的に公演当日に実施。1日2回公演の時には、それぞれの公演前に行われる。武内さんは外国人アーティストと英語で会話を重ねるなどしながら作業。アーティストたちの説明は抽象的な

アーティストの音づくり支える
調律、メンテナンス



ジャズの躍動、熱狂が。

出演者のサインやメッセージが記され、これまでの歴史を語る

活躍の場、新たに 地域で親しまれ

同店は途中で経営主体が変わり、店名も「ビルボードライブ福岡」と変わった後、2009年に惜しまれつつ閉店した。愛情込めて世話をてきたピアノの購入を武内さんは決意。ピアノが活躍する場をつくるため、調律師として働く傍ら準備を重ね、約5年後にミニホール「クラヴィアート音楽館」を開設した。建物の天井を高くし、吸音パネルやスピーカーを設置するなど音響環境も整備。現在、ピアノ教室やコンサートなどがここで開かれている。

かつて世界的なアーティストが、情熱的な演奏をぶつけた鍵盤。今は次代を担う子どもたちが練習曲を奏でることもある。「最高の音に触れてほしい」。新たな活躍の場を得たピアノは、今も物語を紡ぎ続けている。



音楽館内に置かれて
いるピアノ。静かに
時を刻んでいる



【モノ】

■クラヴィアート音楽館=福岡県久留米市善導寺町飯田。貸しホール(有料)としても利用可能。詳しい情報はサイトに(<https://clavivart.com/>)。

●この企画への意見、ご感想をお寄せください。
(宛先)〒810-0721(住所不要)
西日本新聞社メディアプランニング部
「博多モノ語り」係